

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（文責／園長 石川照代）



新しいお友だちが入園しました!

12日(金)は、最高の入園式日和でした。年少さん32名、年中さん25名、合計57名の元気な子どもたちが附属幼稚園に入園してきました。子どもたちは、新たな



友だちとの出会いによって、想像以上に多くのことを学び、成長します。まさに「化学反応」が起こります。それがとても楽しみです。子どもたちの新たな姿に乞うご期待ください!

園長便り「ジャックと豆の木」の今年のコンセプトは?

本園に着任して3年目に入ります。園長便りも2年間で60号を発行しました。これまで、その時々頭に浮かんだことや目についたことをとりとめもなく綴ってきました。以前にも書かせて頂いた通り、自分にとっての貴重な表現の場であり、呼吸するのと同じくらい必要なものでもありますので、今年度も引き続き、不定期ながら発行させて頂きたいと思います。

ただ、漫然と書いて発行するのでは進歩がありませんので、今年度は、自分なりのコンセプトを決めてみたいと思います。幼児教育は、外から眺めるのと内に入ってみるのとでは大きく違いました。外からは見えにくかったものが少しばかり見えるようになった今、幼児教育のありようを「見える化」して外に発信したいと思います。「園長便り」もその効果的なツールとして、最大限に生かして参ります。保護者や読者の皆様の感想もお待ちしています!宜しくお願ひします。

新たなスタートにあたって...

幼稚園の門に並ぶ桜が、今年はやつくりと咲き揃い、ながく私たちの目を愉ませてくれました。中に入ると、玄関わきの花壇では、白がまぶしいノースポールと鮮やかなコントラストを見せる、チューリップ、フリージア、アネモネ、キンギョソウが、いまだ競うように美しく咲いています。これらの花たちが、附属幼稚園では、鑑賞の対象でなく、子どもたちの遊びで使う「素材」であるというのを知り、とても驚いたのは2年前の春でした。花は目で愛でるものという価値観が良い意味で崩れた瞬間です。

もちろん、自由に摘んで遊んで良い花と、そうしてはならない花は区別します。「素材」としての花は、先生方が冬から計画的に育てているのです。その配慮と計画性にも、感動したのを覚えています。



今、幼児教育は世界中で熱く研究されています。幼児期に受けた保育・教育のあり方が、子どものその後の人生を左右すると言われているからです。庭に花を植えることの意味づけ一つをとっても、おそらく園によってさまざまあることでしょう。大事なことは「この意図でいいのかわ」他に良い方法はないのか」と、自園の保育のあり方を常に見直し、話し合い、試行錯誤の歩みを止めないことだろうと思います。これが昨今耳にする多くの多い教育界のキーワード「カリキュラム・マネジメント」ということになるのでしょうか。

本園はこれからも、社会の変化やニーズを敏感に捉えつつ、「カリキュラム・マネジメント」の充実を図り、職員一同精進して参ります。今年度も変わらぬ皆様のあたたかいご支援を宜しくお願ひ申し上げます。

園長 石川照代